

アル社長を曇らせたいブルアカSS

一般通過猫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アル社長や便利屋、風紀委員と後先生あたりを囁らせるのが目的の
s sなので性癖が噛み合わない方は読まない方がいいと思います。

キヴォトスの平均的日常の一角
常識人（※ゲヘナ基準）

目

次

キヴォトスの平均的日常の一角

キヴォトスの空はいつだつて美しい。

抜けれるような青さに白い雲、燐光を放つ大きなヘイロー。

雨や雪を降らす顰めつ面の時も、その雲の切間から覗くヘイローの曲線が弧を描く口元に見えて、それが笑顔みたいで。

いつだつて私たちを見守つてくれる、そんな優しげな姿を、空に感じ取れた気がして。

そんな空にの下でなら、どんなことでも頑張ると、そう思つていた。

まあ、そんな純情でポエミーなことを考えていたのも小学生の頃までだつた。

『ウオオアアアアアアアアアアアーーー!!!!』

ばきゅーん、どかーん、ずがどーん、だーーーーー、がつしやああん

「ぐえああ!?」

「つ!?

突如として窓ガラスをぶち破つて突つ込んできた推定人型物体。

いくつものガラス片が引っかかつて触れるもの皆傷けるハリネズミと化したそれが思いつきりぶち当たつて、私は腰掛けていた椅子や机ごと吹き飛ばされて仲良く壁に叩きつけられた。

首から鳴つてはいけない音が聞こえた気がする、視界が歪む、口の中に血の味が滲む。

そしてあまりにも理不尽な災難に見舞われた私の胸中には、それを嘆く悲しみの情が少々と、比較にならないほどの怒りが込み上げてきていた。

「くつそー！　あいつら調子に乗りやがつて……目にもの見せてやる！」

ガチャリ、とショットガンをコツキングするガラスハリネズミ。

私は変な方に曲がった腕を無理やり引き伸ばして正常な形に戻し、

そんなハリネズミの肩をポンポンと叩いた。

「あつ!? なんだよ今のつぴきならねえ戦いのさ……いちゅ……」「へえ、そいつは大変だ、私も手を貸してやるうじやないか」

笑顔とは攻撃性の表れだという。

であれば今の私はさぞ、慈悲深き表情をしているのであろう。

口はへの字に曲がり眉は逆さに吊り上がり目はバツチリと見開いた、それはそれは怒り散らした表情は笑顔とは程遠いだろうから「ゲーーーーーッ!? て、テメエは風紀モドキの……!!」

「ひとまず全員、片つ端から身動きとれないようにしてやる」

とりあえず掴んだそいつの肩を握りつぶして壁に叩きつける。

全治2日程度の軽傷を負わせた私は、ぶち破られた窓の外で馬鹿騒ぎを続ける救いのない生徒諸君を黙らせるべく愛銃を掴み外に躍り出た。

この無益な争いを終わらせ、ゲヘナに平穏を取り戻すために舞い上がった私の姿はきっと素晴らしく『トリニティ』めいていたであろう。

* * *

ノックを四回、きつちりこなして返事を待つ。

可愛らしい声で入室の許可が出たので、ドアノブを回してその部屋と踏み行つた。

「失礼します。 風紀委員長、今日の午後2時過ぎに発生した校庭での乱闘騒ぎに関して、被害をあらかた調べ上げ、また仕立て人を全員縛り上げ反省室にぶち込みました。 こちらにまとめあります、どうぞ」

「ええ、助かるわ」

ゲヘナらしい装飾に彩られた風紀委員本部の執務室の奥に座する、空崎（そらさき）ヒナ委員長にまとめ上げたレポートを手渡すと、彼女はかすかに微笑んだ。

「お疲れさまです、入間さん」

「おかげで助かつた。特に全員再起不能にしてくれ辺りとか」「また暴れられたらコトでしたから、あとついでに新品の椅子を破壊されたので」

「ああ……」

わざわざ校庭から離れた位置に確保した部室にピンポイントで突っ込んできやがつて、使い慣れたテーブルも椅子も見事にバラバラにされてしまつた怒りは根深い。

主犯格の生徒は念入りに踏み躊躇つておいたので、トラウマを覚える程度の知能があればもうこちらに被害を及ぼすことはないだろう……が、相手はゲヘナ生である、望みは薄い。

「災難だつたわね、テコ……はあ、また修繕費が嵩む、書類が増える……」

「……あれ？ 入間さん、これ入間さんの部屋の被害が書類に記載されていませんが？」

「そつちはこちらで支払つておきます。蚊に刺された程度にもならな出費だがら気にしないでください」

風紀の面々はちょっと働きすぎだから、協力できるところは協力する。

こちらで勝手に修繕するのならばわざわざ届出を出して仕事を増やすこともない、その代わり窓ガラスや壁の材質を無断で強固なものに改造するが、そのあたりはヒナ委員長は黙認してくれる、お互いにwinwinのやりとりと言えるだろう。

苦笑するアコさんにパツチリとウインクを返した、どうか見逃してほしい。

「では今日はこれで失礼します」

「あら、もうですか？」

「お仕事お手伝いしたい気持ちは山々なのですが、ちょっと受けたダメージが抜け切つてなくて」

「わかつた、しつかり休んで、テコ」

「あなた方も、ね」

私がそういうと疲れたような笑みを浮かべる2人。
どうかこれ以上仕事が増えませんように。

まだ違和感のある首をゴキゴキと鳴らしながら、報告を終えた私は執務室を後にした。

学園都市、キヴオトス。

数千の学園が連邦を成した超巨大学園都市。

主な住人はロボ、犬、猫、生徒。

女集団が頻繁に集まつては姦姦姦姦姦姦姦姦姦しい銃撃騒動が、そちらじゆうで発生するなんとも賑やかな街であり、そして私、入間（いりま）テコもそこに住まう生徒の1人だ。

髪は茶髪で背丈は平均よりちよい下、趣味はカラオケで誕生日は9月29日。

至つて平凡なゲヘナ生徒である私には、少しばかり秘密がある……と、「山いくらの小説なんかならこんなふうに物語が始まるのだろうが、私には大それた秘密なんでものはない。

足繁く学園に通い、勉強に精を出してお洋服の買い物にお熱を上げる。

そんな、掃いて捨てるほどいる学生の1人に過ぎない。

強いていうのであればゲヘナ生にしては随分と勤勉で真面目なことだ。

ヒナ委員長にそう評されたのだから、間違はない。

あとはまあ、たまに不良狩りをして迷惑料を徴収する程度かな。

「えーっと今日はどうしようかな……」

スーパー・マーケットに立ち寄り、今日消費してしまつた弾薬を補充しつつ、本日の晩御飯のメニューに想いを馳せる。

食べ盛りの子供を満腹にするには味だけではなく量も重要だ。ふと視界の片隅にかた焼きそばなんものが映る。

これなら餡を作つてかければ出来上がりだから手軽だし、なかなか食べる機会もないようなものだから新鮮な気持ちでいただけるんじやないだろうか。

よし、これに決めた。

麺を五つと、餡掛けに使う材料にとりあえず玉ねぎとキャベツ、それとおやつとかコーラとか。

後は手榴弾をいくつか放り込んでお会計を済ませる。

ずつしりと重いマイバッグが繫がりかけた右腕に負荷をかけてくるのがなんとも痛気持ちいい。

明日は部室の修繕でちよつと忙しいから、今日のうちに気分転換は済ませておきたい。

私は左手でモモトークを起こし、お目当ての人物へとトークを送った。

『今日は晩ごはん作りに行つていい??』

『食べたい!』

『わかった、もう少ししたら行くね』

とつぐに材料を買ってから訪ねるのなんて変だけど、断られた試しがあまりないのでつい、惰性でこうしてしまう。

無邪気な返事に温かい気持ちになりながら、目的地のビルへと足を向けた。

「おじやましまくす」

「あ、いらつしやい」

扉を開けると、立派な事務所が待ち受けていて、その中のソファに1人少女が腰掛けていた。

親しげに声をかけてくれた彼女は立ち上がり、私の右手のバッグを預かってくれる。

「ここにちはカヨコさん」

「うん、ここにちは、今日もありがとうございます。何作るの?」

「かた焼きそばの予定でござりますよ」

「へえ、いいじゃん」

「他のみんなは?」

「今は外回り中、といふか仕事探しだつて」

それはまたご苦労なことで。

事務所に備え付けられているガスコンロに火をつける。

見栄を張つて高いところに居を構えてるだけあつて、割と設備が整つてゐるから調理に関して不便は少ない、冷蔵庫にコーラとキヤベツを突っ込んで、使う材料は適当にスペースに並べておく。

きっとお腹をすかせてるだろうから、帰ってきたらすぐに出来立てる用意してあげたい。

「手伝うよ」

「ありがとう、皮剥きお願ひしますね」

にんじんやら玉ねぎやらの処理をお任せしつつ、フライパンに油を敷いて片栗粉やら調味料やらを棚から引っ張り出す。

うん、全然減つてないや。

もう少し自炊とかした方が食費は浮くと思うのだが、事務所の一角でフライパンをちゃつちやか振り回すのはアウトローの美学に反するのだろうか。

溜息を一つこぼしながら手早く餡を作っていく。

「最近はどうですか？」

「仕事自体はあるよ、ただ割とピンチな時も多いかな」

「やつぱり仕送りしましようか？」

「いやーキツイでしょ」

「社長が？」

「私もキツイかな……友達からお金恵まれるっていうのは」

「いまさらじゃないかな？」とは口には出さない。

できるだけ彼女たちの生活に手助けはしないのがお互いの暗黙の了解だ。

料理の味見役をお願いしたいという形でご飯をたびたび作りにきてるけど、それだつて本当はあまり良くない。

私が彼女の役に立ちたいという我儘を押し通してるだけなんだ。

それからしばらく無言で、最近ハマってるバンドの音楽なんかをスマホで流しながら作業を続ける。

あとは餡を弱火で煮込み味を整えるだけだけど油断すると焦げ散らかすので目を離すのはNGだ。

と、それから数分もしないうちに、事務所の階段をかつかつと鳴らす音が響き始めた。

「帰ったわ」

「ただいまー！　あ、いい匂いがするー！」

「お、お疲れ様でした……」

「3人とも、お邪魔してま～す」

「テコ、よくきたわね」

キツチンから顔を出すと、アルちゃんが不敵な笑みでもつて歓迎してくれた。

ペコペこと頭を下げるハルカちゃんとヒラヒラ手を振るムツキちゃんに軽く手を上げておく。

「ご飯もうすぐ準備できるから、手を洗つて座つててよ」

「ええ、ありがとうございますテコ」

「わーい！ 今日は何を作つてくれたのかな？ 見せて見せて～！」

キッチンを覗き込んでくるムツキちゃんを見守りつつも、お皿に碎いたかた焼きそば麵を盛り付け餡を乗せていく。

物珍しい一品だからムツキちゃんが目を丸くしているのがなんだか愛らしい。

あとは人数分のコップと開けたばかりの1・5Lコーラのボトルを運び込んで配膳を済ませればあつという間に晩御飯の準備完了だ。「はい、本日はかた焼きそばです。お味の批評を是非ともお寄せください。あつついから気をつけてね」

「かた焼きそば？ なんだか聞いたことないけど美味しそうじゃない！」

エビに豚肉に色々野菜も混じつた餡が絡んだかた焼きそばは見た目はなかなか美味しそうだ。

各々が好き勝手に匙を手に取ったのを見て、私も早速口に運ぶ。

「んん！ おいしい♪ テコちゃんまた上達した？」

「カヨコさんが手伝つて味見してくれたからね」

「皮むきとカットしかしてないって」

「お、美味しいです。ありがとうございますテコさん……」

みんなも美味しそうに食べてるのでどうやら上々の出来のようだつた。

少し嬉しい気持ちになりながらもちらりと視線をアルちゃんに移す。

さつきから黙つてゐるけど何か口に合わなかつたかな？

「……!! ……っ！」

あつ、必死に口元押さえて歯を食いしばつてゐる。

ははん？ さては餡をガツツリ頬張つて火傷したかしら？ 片栗粉でとろみつけるとなかなか冷めないから、油断するところなつちやうのだ。

「お水汲んでくる？」

「あ、あいひよふ……おいひいは、あいあおう……」

涙目になつてるしこれは舌を派手にやつたかも知れない。

私は黙つてキツチンへ向かい、よく冷えた水をコップに入れあげた。

「焦らなくていいからゆつくりね」

「わ、わういわへ……」

もう完全に呂律が回つてない痛々しい姿は完全にドジつ子のそれだがそれを口にしない情けが私にもあつた。

そのあとはなんというトラブルもなくみんな綺麗に完食してくださいました。

お粗末さまでした。

* * *

「じゃあ今日はそろそろ帰るね」

「大丈夫？ 大通りまで送ろうか？」

「大丈夫ですよ。 ジャあまた連絡しますね」

そのあと私たちは近況報告も交えつつお菓子を摘みながら時間を潰したりなどした。

気がつけば時計は単身が左上の方を指すくらいの時間になつている、そろそろ帰つた方がいいだろう。

そういうわけで事務所を出ようとすると私にカヨコちゃんがそう言つてくれたが、それをやんわり断つて、私は外に出た。

便利屋の面々は、強い。

一人一人が、私よりもずっと。

だからこんな路地裏に住処を作つても平然と暮らしていけるのだ。

「……」

カツカツと大通りへと向かう道を進みつつ、背後をつけてくる気配を感じ取った。

そのまま構わずまっすぐ進む。

おそらく、既に連絡が回って周囲を取り囲まれているだろう、小路地に身を隠そ者が封鎖されているだろうからなるべくまっすぐ短い道を行く方がいい。

数を相手に小細工はあまり意味がない。

ダガン、と銃声が聞こえるよりも早く、背負っていたバッグパックを左手に掴み体の前の方を覆つた。

ガン、ガンと硬質の金属をぶつ叩く鉛玉の音。

それと同時に多数の足音と共にいくつかの人影が私の前へと姿を現した。

「昼間はよくもやつてくれたな風紀モドキ」

「……うわあ、どうせ理解^{わか}つてないとは思つていたけれども、まさかその日のうちにリベンジしにくるとは。 というか、よく怪我治つたね」

「治つてないが？ 今もまだお前に念入りに踏み碎かれた左腕がズキズキするが？」

「じゃあなんで今日この日に襲撃してくるんだ……」

案の定そこに姿を現したのは、私が念入りにミンチにしておいた本日のゲヘナ暴動の首謀者とその取り巻きの連中であつた。

「こうも舐められっぱなしじゃメントが立たないからな、 風紀委員に媚を売るお前みたいな奴がゲヘナじやどうなるか、そろそろ教え込んでやろうつづいたら賛同者がたくさん出てきたんだよ」

「そのバイタリティを学生らしく勉学へ向けろよ不良ども……ま、ちようどいいかな」

言つてもわかるまい。

言つてわかる連中だつたら、そもそもこの場に足を運ぶことはないからだ。

連中は本当にわからないのだろうか。

風紀に協力的な私をリンチにかければ、風紀に徹底的にマークされることが。

その辺りが考慮できなからこんな馬鹿なことができるんだろう。
「私ちと生ぬるかつたと思つてたんだよ、昼間の仕打ちがな」
控えめに言つてあまりよろしくない状況だが、こんな馬鹿どもに許しを請うのはプライドが許さない、私にだつて、つまらないながら意地がある。

心を奮い立たせ、付け入る隙を隠すように私は唇で弧を描いた。
「ひとまず……高級作業チエアにテーブル、窓や壁の補修代金としてお前ら全員の有金と無人契約機で限度一杯まで引き下ろした金を請求させてもらうとしよう」

「おおそれはいい案だ！　ただ払うのはてめえの方だがなあ!!」
頭目が私に向けてアサルトライフルの銃口を向けてくる。

それを認識するより前に私は動き出していた。

「せいつ!!」

「のわつ!?」

左手のバッグを軽く放りそれを思いつき足裏で蹴り飛ばす。

突然眼前へ迫つてきた鉄鋼入りシールドバッグを慌てて避けようとした頭目、カバーしようと動き出す取り巻きども。

全てが遅い。

その時既に私は背負っていたライフルを引き抜いていた。

——MR《マーカスマンライフル》ウイツチ・ステッキ。

横倒れになるよう体を傾けて射線から胴体を逃しながら、その銃口を慌てふためく頭目へと向ける。

頭に二発心臓に二発、快音がその数だけ響き渡る。

「ぐべえ!!」

吹き飛んで壁に叩きつけられたのを目視してから、地面に手をつき、一気に転がつて近くのコンクリートブロックに体を隠す。

直後に猛烈な勢いで鳴り響く発砲音、背負う遮蔽物に猛烈な勢いで弾丸が叩き込まれる。

一気に場が熱を帯びてくるのを感じながらポケットのグレネード

を敵の集団の方へと投げ込み、先ほど投げたシールドバッグに向けて左手に仕込んだ電磁マグネットを作動させる。

ゴミを巻き上げながら一気に舞い上がり戻つてくるバッグを確保、ライフルを保持しバッグでガードを固めながら物陰から飛び出す。

その直後、ちょうど放り投げたグレネードが炸裂する。

慌てて回避したのか陣形が崩れている敵に向けて素早く弾丸を叩き込んでいく。

(視認できる敵の数は、8……おそらくあと三倍はある)

ここへと駆けつけてくるであろう敵増援を想定すると、ここにとどまるのはよろしくない。

であれば、取れる手段は一つ。

「お前だな」

「ぐつ」

地面に転がっていた頭目を引き摺り起こして、敵集団の方へとその体を向けさせる。

ていのいい肉盾だ、少なくともない頭を振り翳して色々命令するよりこっちの方が役に立つだろう。

「て、てめ」

「喋るな」

「ぎやあ?!」

ストックで思いつきり頭部をぶん殴つて黙らせた。

多くの敵がこの状況に困惑し射撃を躊躇し、その隙に大通り側へと一気に敵を突破し駆け抜ける。

一方向に敵を固めてしまえば後はそのまま立ち去るなり1人ずつ処理するなりいくらでも対処できる。

まずは包囲網を突破するべくいつきに踏み込み……

「死ねえー!!」

「は?」

「え?」

考えなしのバカが放ったグレネードランチャーがちょうど私の真横で炸裂するのを、頭目と一緒に間の抜けた声で迎えることとなつ

た。

「つ……クソ」

甲高い耳鳴り、明滅する視界、咄嗟に肉盾を向けて爆発から身を守つたものの爆炎と破片は容赦なく私をビルの壁に叩きつけ、ついでに庇いきれなかつた右腕の一部に大きな破片が突き刺さつた。

ちよつと頭目の方は今日を向けたくない、グレネード一発では逆立ちしても死ねないだろうが悲惨なことになつてゐるだろう……

「リーダー！ あんたの犠牲は無駄にはしない！」

「私たちがこいつを成敗して、あんたの意志を継ぐよ！」

「ぶつちやけあんた馬鹿すぎてついていけなかつた!!」

色々はつちやけるじやねえか……

ライフルを杖代わりに体を起こせば、壁を後ろに180度を不良どもに取り囲まれていた。

全員がニヤニヤと笑つて勝利を確信している。

気に食わない、気に食わない、気に食わない。

「さて、風紀モドキさんよお。 あんたには散々世話になつたから、特別におもてなしさせてもらうぜ？」

「まあまづはうちらのアジトでさ、歓迎会といこうや」

集団の中の1人が、私の方へと無造作に手を伸ばしてきた。

足はふらふら、銃は杖代わり、今の私は手も足も出ない瀕死の獲物。

そう、思つたのだろうか。

嗚呼、本当に……

気に入らない。

なので私はその掴みかかつてきた手に思い切り噛みついた。

「げつ!?」

「つ——！！」

声にならない雄叫びをあげながら、私は銃を支える手と首と顎の力でそいつを思いつきり振り回した。

想定外の反撃に慌てる集団に向けてそのまま思いつきり振り回しあそいつを叩きつける。

わずかな空白、その隙にポケットのグレネードを地面に叩きつける。

こいつは接触信管だ!!

「グレ——」

1人の声が響き、そして爆音に消し飛ばされた。

一発も二発も変わらないだろう、その覚悟で自分ごと敵集団を吹つ飛ばして脱出。

身体中火傷と鉄片で酷い有様だが、こんな奴らに負けるよりはよほどマシだ。

(服の買い替え費用も追加だな……)

歪んで真っ赤になつた視界の中で、怒り散らした敵たちのいくつかが起き上がるのが見えた。

その後ろから駆けつけてきた増援達。

グレネードは後一発。

状況はよろしくない。

だがこんなところでは負けられない。

「私は、ゲヘナ一年生、風紀委員予備戦力、そして便利屋68の外部協力者入間テコだぞ……」

変な方に曲がつた指を引き伸ばし、マガジンを入れ替える。

逆さに折れた足は動くのに適さない、その場に腰を下ろし離さなかつたシールドバッグを体の前面に置き、ライフルを敵集団へと向ける。

「かかって、きやがれ……!!」

次からはこんな状況に合わせて、弊所でも取り回しの良いサブマシンガンでも携行するようにしようか、怒りのままにこちらに攻撃を仕掛けってきた敵達に対し反撃を開始しながら、そんなことを思う。

隠しきれない肩口や頬を銃弾が掠めていく。

徐々に彼我の距離が詰まっていく。

足を集中的に狙い転げさせ遅延させる。

最後のグレネード投擲、爆破。

敵は残り、4。

最善手を、最善手を、最前手を——

構えていたライフルが、銃弾を受け弾き飛ばされた。

嗚呼、なんということだろう。

まさかこんな奴らにやられてしまうなんて。

まさか想像もつかないほど人望のないリーダーと想像の外にいるほど馬鹿な部下という組み合わせのせいで、こんなそちら辺に転がつてるような騒動でやられてしまうなんて。

(まあ、私なら所詮、この程度か……)

本当は、頼りたくなかつたんだ。

私でもできるんだということを証明したかつたんだ。
でも、やっぱりダメだつたようだ。

だから助けを求めた。

その直後、私の背後に数人の気配が現れた。

「後は任せなさい」

振り返った先に、緋色の髪を闇に靡かせるシルエット。

片手間に操作したスマホでメチャクチャなモモトーグを送つてお
いた。

それを、察してきてくれたのが、嬉しかつた。

「アルちゃや……」

崩れ落ちる体を抱き抱えられる感触。

それを最後に、私の意識は闇に落ちた。

常識人（※ゲヘナ基準）

突然だが今私は正座をさせられている。

ふかふかソファの上、膝を折った姿勢で座りこみ、両手をその曲がった膝の上に置いて首を垂れている。

「どうしてあんな無茶をしたの？」

「ごめんなさい」

「すごく心配したんだから」

「申し訳ありません」

「火傷と裂傷でズタズタの姿を見たときは背筋が凍つたわ」「返す言葉もございません」

「あらら、アルちゃんてば珍しくすつごーい怒つてる」

「いや怒るでしょ、だから送つてくつて言つたのに」

「あ、アル様がお怒りに……私がついていつて身代わりになつてれば……」

周りの3人がさまざま反応をする中、じとりと細めた目で私を見下ろしてくるアルちゃんにこんこんとお説教をされていて、それを甘んじて受け入れるという生き恥を晒している最中であった。

* * *

鈍った脳みそを鈍痛に揺さぶられて、目が覚める。

瞼を開いて、ぼんやりとした視界が開けていつてまず、なんでこんな痛いんだろうと身体中がジクジクと蝕む疼きに顔を顰めた。

次にふと見慣れない景色にここはどこだと混乱してから、壁にかけてあつた時計がお昼頃を指しているのを見て、今日が平日であることだけはしつかり覚えてて、心臓が嫌なビートを奏で始めたりした。

寝過ごし確定状況、見慣れない部屋、痛む体。

これらの情報が脳内でまぜこぜになつてしまらくの間混乱の最中にあつた私を掬い上げたのはコツコツと響いたノックの音であつた。「し、失礼します……あ、お目覚めになられたのですね、よかつた……」

はたして返事も待たずに入室してきたのはハルカちゃんだ。

彼女の顔を見てようやく夜中の出来事を思い出した私は、包帯まみ

れの痛む腕を持ち上げて、額を抑えた。

「そうかあ、私は負けたんだつた……あんな出来損ないどもに」
手を煩わせたくないという意地を張った結果結局彼女たちに助けてもらうという更なる迷惑をかけてしまつて。

そのみつともない結末がこれとは、私は羞恥で俯いた。

「お、お身体の方はどうですか？」

「あ、えーっと、うん。 大体良さそう、かな？」

私の体は少し治るのが遅い。

至近距離でのグレネードの爆発を二発もくらつたものだからまだ刺すような疼くような痛みが身体中を蝕んでいるけれど、少なくとも昨晩の掠れる意識の中鋼鉄の処女の胎内に抱かれるような苦痛と比べれば雲泥の差、という程度までは回復している。

そう告げるとハルカちゃんはほつと一息ついた。

「そ、そうですか、よかつたです……あ、私、お目覚めになられたことをアル様に教えてきますね！」

「ああ、はい」

そうして部屋の外に出ていったハルカちゃんをぽけーっと見送りながら、さてどうしたものかと私は考える。

とりあえず、今日は学校を休む旨を連絡しなければならない。

まずはモモトークを開こうと枕元に手をやり……スマホが無い。

どうしよう、連絡手段ない。

そうなると電話でも借りて連絡をしなければならないのだけれど。どうしようどうしようと、うんうん唸つているとカツコツ靴音が近づいてきて、扉の方からぬるりと事務所の主であるアルちゃんが顔を覗かせてきた。

「テコ……目が覚めたのね」

「はい、おかげさまで。 昨日は、ご迷惑をおかけしました」

「気になくていいわ。 テコは便利屋の外部協力者だもの、仲間の

危機とあらば決して見捨てはしない」

「おおー、アルちゃんカツコイイ」

「まあ、それはそれとして」

「はい」

「テコ、正座をなさい」

そして、冒頭に戻る。

「今度からは夜遅くになつたら送つて行くから。 それと夜遅くに尋ねてくる時も連絡しなさい迎えに行くから」

「ハイ……肝二銘ジマス……」

「まあまあアルちゃんその辺でさ。 お陰で結構な稼ぎもあつたしテコちゃんも悪気はなかつたし！」

そんな光景から目を逸らし、そろそろ足が痛みと痺れで辛くなつてきた頃にムツキちゃんがフォローをしてくれた（稼ぎとやらはテープルの上に積み上げられた雑多な財布やら軍需品やらを見て大体理解した）。

仕方がない、といったふうにアルちゃんがため息をついたので、隙を逃さず私は足を崩した。

ムツキちゃんが対して細くとも太くもない大腿部をツンツンしてきて猛烈な痺れに思わずうめく、やめい、やめぬか。

「まあでもホント心配したから。 社長なんか泣きすがつてこれどうしようどうしようつて騒いでたし」

「カヨコ」

「はい、本当にこれからは気をつけるし遠慮なくご厚意を受け取ります。 アルちゃんも本当にありがとね」

「……もうほんとに無茶しちゃダメよ？」

アルちゃんが仕方がないといった具合に笑ってくれて、ようやく場の空気が弛緩した。

「で、ここで話が変わるのでんですけど」

「なになにどうしたの？」

「便利屋の皆さんに依頼があります、今日1日ここで匿つて養生させてもらえませんか？ 後電話貸して……」

* * *

私という存在を一言で説明すると、「とてつもなくめんどくさい女」

だ。

……もう少し詳しく説明する。

まず、私『入間テコ』は厨二病である。

それもまだ物心を覚え始めた頃から今までずっと継続し続けていて、直そう直そうと思つても未だ夢想を捨てきれずにいる筋金入りのみつともない女だ。

自分という存在の矮小さを、年月と共に自覚しながら尚身に余る夢を捨てきれずにいてそのくせ弱さを理由にそれに挑戦することもできない、掃き溜めに寄せ集められた虫のように価値のない存在。

幼少の頃は何にだって挑みかかる危なつかしいガキだったそうだけれど、少なくとも、訳知り顔で何にでも消極的な姿勢である今の私と比較すれば月と籠ほど価値の差があるだろう。

そしてそんなダサい自分のことがたまらなくキライだ。

それ故に、私は誰かに助けてもらうのが好きではない。

価値のない自分のために誰かに労力を割かせるのが申し訳ない……というわけじやなく。

自分の失敗をフォローされるその過程で、無能だと迷惑なやつと思われて嫌われるのが怖いからだ。

逆に誰かの役に立つのは好きだ。

自分よりも価値のある人たちの手助けをすれば、自分なんかにも存在する理由はちゃんとあると、ホツとできる。

全てにおいて自分を中心いて物事を考える自虐的で厨二の痛々しい女。

それが、この『入間テコ』という女に対する自己評価となる。であるからとして。

「はい、あーん」

「やめたださいまし、やめてくださいまし」

このようなシチュエーションに遭遇すればキヤパオーバーになるのは明白でございまして。

「ムツキちゃん、手は普通に動かせるから大丈夫でござりますから普通に食べさせてくださいまし」

「だ～めっ！ 依頼を受けた以上は完璧にこなすのが便利屋68のモットーみたいことアルちゃんがいつてたようないつてなかつたような気がするから、完璧にお世話しちゃうよ～」

「やめてくださいまし！ やめてくださいまし!!」

あの後二つ返事で依頼を受理してもらえた私は、まず真っ先にゲヘナへと連絡を入れた（スマホは奇跡的に無事だつたらしく充電器に刺されて安置されてた）。

『不良集団に囮されて心も体も参つてるので本日は休ませていただきます～テコ～』みたいな至極ふざけた内容だつたがゲヘナはその辺り適当でなんなら休日申請しないやつの方が多いので問題はない。

ヒナ委員長にもモモトークしといたのでとりあえず安心だろう。

それを終えてからようやく再び仮眠室のベッドを借りて横になつたのだが、何も食べてなくてご機嫌斜めな声を上げたお腹に顔を赤くしていたところムツキちゃんがプリンを持ってきてくれたのだ。

まあ昨日私が買つてきたやつだけど。

ちなみにカヨコさんは替えの服を買いに行つてくれて、アルちゃんとハルカちゃんは周囲の哨戒に出てる。

それはともかく、あーんである。

漫画でよく見るアレ。

私個人のクソみたいなコンプレックスは置いとくとしても見た目私より幼いムツキちゃんにそういうことやられるのは普通に恥ずかしい。

「自分のペースで食べたいからさ、お願ひ」

「ダメ～、これはアルちゃんの言いつけなんだよ？ テコが無茶しないようになさいって」

「無茶でもなんでもないじゃないですか」

プリンを自力で食べるのが無茶ならゲームガールをプレイするのも無茶に分類されそだな」とか思いつつ。

ニヤニヤとこちらを眺めてくるムツキちゃんに観念して、私は雛鳥のように口を開けてプリンを受け入れた。

うん、安物の甘い味わいがなぜか今はありがたい。

「それにしてもテコちゃん、なんあんことしたの？」

「あんなことつて？」

「多勢に無勢じやん。普段はあんな無茶しないでしょ？」

「勝てる見込みはあつたんです、本当ですよ？ そうすればあいつらから迷惑料としてお財布の中身と無人契約機で限度いっぱいに降ろさせた金を根こそぎ徴収しようと思つて」

「そんなにお金必要なの？」

「あいつらのせいで今日部室が破壊されてイライラしてたんですけど」

「ははーんと納得したような相槌をしたムツキちゃん。

貯蓄はある、あるがそれもガンガン使つていいほどじゃない。

それなのにあいつらのせいでぶつ壊されたのなら修理代と迷惑料治療費etcを請求しても、バチは当たらないはずだ。

「それがまさか頭目ごと巻き込んで爆破してくるとはね……」

「うわー、それはバカじやん」

「ほんとね……そういうえば、そのバカどもは？ 武器とか財布はかつぱらつてたみたいだけど」

「みぐるみ剥ぎ取つて裏通りに捨てておいたよ」

まさに悪の所業、私は思わず拍手を送りムツキちゃんはピースをしました。

これで便利屋68の悪名はさらに知れ渡るでしょう、アルちゃん的にはかなりめでたいお知らせだ。

「あれで理解してくれれば助かるんですけどね……またあいつらが暴れ始めたらそのときは素直に依頼するかもしません。生まれてきたことを後悔するくらい痛めつけてあげて欲しいって」「任せてー！ そういうのだいっ歓迎だから！」

「頼もしいなあ。あーん」

プリンを受け入れながら、雑談に興じつつ、思考は外側へ。

便利屋のみんなのおかげで当面の危機は脱したと見ていい、でれば次の課題は明日の過密スケジュールをどうこなすかである。

明日には私の怪我も完治するだろうけど、その後が問題だ。

まずは私を襲撃した奴への厳罰を提案しなきゃいけないし、部室の

修繕依頼もしなければならない、修復業者には護衛をつけなきやいけないしそろそろガジエットの〆切も近い。

風紀委員の仕事も手伝わなきゃいけないし便利屋通いも続けなければ。

これから一週間は退屈とは無縁の日々になりそうだ。

「まあ、まずはこの怪我を治してアルちゃんに外出許可をもらうのが先決かなあ。 あーん」

「はい、あーん……ぱくつ」

「あーっ！ なんでムツキちゃんが食べるんですかー！？」

「くふふ、おいしそーだつたんだもん！」

この体ではろくに抵抗もできず、たまに差し出されたプリンを没収されたりしてじやれつきながら、今日はそのままのんびりとした1日を送ることとなつた。

「これはひどい」

翌日、アルちゃんに本当に大丈夫かと心配されながらもすっかり良くなつた私はゲヘナ学園は登校したのだが、朝イチで確認した部室はそれはひどいことになつていた。

おそらく規制線が張つてあつたであろうポールは横倒しにされ、砕け散つっていた窓ガラスはさらに念入りに破壊され部屋の中は荒らされ放題だつた。

まあ、ゲヘナ基準で言えばこの部室は現在『どうぞお入りください』と看板が立ててあるようなものだ、金目のものは根こそぎ奪われただろう。

取り敢えず天井の四隅に仕掛けた監視カメラが無事であることは確認したので犯人は全部特定して戦車轢き潰しの刑に処してやろう。

そんな物騒なことを考えている私の背中に声がかけられた。

「ごめんなさい、警備に人手を使えなかつたの」

「え？ あ、ヒナさん」

「おはようテコ。 怪我はもう大丈夫？」

振り向けばそこにいたのは風紀委員長のヒナさんだった。

私より頭半分ほど低い背丈からは想像もできない圧を放つていて、
けど、こうでもしないと身の程知らずがちよつかいをかけてくるとぼ
やいていたのは随分前のことだった。

「おかげさまで、怪我はすっかり良くなりました。 盗人は後で特定
して『私刑』にかけますので見逃していただけますか?」

「やりすぎるのはほどほどにしといてね」

「それはもう。 ところで開発中の新型防護ガジェットですけど、こ
の惨状なのでちょっと完成が遅れるかもしません」

「大丈夫、それはもう織り込み済みだから。 テコは焦らずいいものを
を完成させて。 ジゃあ、無事も確認できたら私は仕事に戻るから」
「はい、ありがとうございました。 放課後にお手伝いに行きますか
ら」

小さく手を振つてくれたヒナさんに頭を下げる、ひとまず私は窓枠
を乗り越えて部室の中に入つた。

暴虐のかぎりを尽くされた部室ではあるがこんなもの日常茶飯事
なので気にすることはない。

ふと、どうやら衝撃で外れはしたもの破損は少ない部室の看板が
足元に置いているのを見つけた。

これは再利用できるだろう、埃を適当に払つたそれには、『ガジェッ
ト開発部』という文字が書かれている。

——ガジェット開発部、通称ガジェ発。

今は三年の先輩方が設立した、その名の通り様々なガジェットを開
発する部活だ。

日用品から戦闘補助、さらには独自のOSまで開発するような手広
い活動内容が売りで、ゲヘナの中では数少ない真面目な活動をする部
活で私もその評判を聞いて入部した。

ところがそれらは全部監視の目を欺くために猫をかぶつていたに
過ぎず、秘密裏に地下施設で開発していた都市部制圧用侵略ロボ『パ
ルバライサ』作成こそがガジェット開発部の本当の目的だったのだ。
ちなみに私が風紀委員にそれをチクッたので計画はその日に頓挫

した。

完成まで後二週間、ギリギリだつた。

当時一年の私以外の全員がお縄になつたので、今や私だけがこのガジエ発のメンバーだ。

取り敢えず業者に電話を入れてから、部屋の掃除を開始する。

散らばつた破片、こびりついた血痕、薬莢その他諸々全部片付けるとなると相当な手間だ。

巨大な残骸なんかは適当に外に放り出していくと、その中でキラキラと金属光沢を放つ物体があつた。

どうやらこれは、盗人の手から逃れたらしい……まあ、残骸の中に埋もれてたし。

「どれどれ？　おお、内部も無事っぽいですね」

引き摺り出した開発中ガジエットを点検し、どうやらさほど破損した部分はないことを確認する。

細かい傷なんかで済んでるあたり、これの頑丈さの証明になつたのではないだろうか。

取り敢えずスイッチを入れると、オクタゴン型の金属塊の各所に電源が入つたことを伝える光のラインが浮かび上がつた。

そのまま取っ手に手をかけて起動スイッチを入れる。

直後、その分厚い金属塊は即座にその姿を変えて、けたたましい音を立てながら広がっていく。

最後に地面上にアンカーを突き立てたとき、私の正面には、厚さ1センチの特殊合金でできた巨大な壁が出来上がつていた。

防御用ガジエット『キヤツスルウォール』。

風紀委員の要請を受けて新たに開発した、汎用防御拠点生成装置である。

本当なら、襲撃を受けたあの日のうちに提出する予定だつたものが、これなら最終調整を終えれば即座に届けることができるかもしない。

そうなればヒナさんも少しは喜んでくれるだろう。

これがあれば、一昨日の襲撃にも、もつと余裕を持つて対応できた

かもしだれない。

「よし……」

そうと決まれば。

私はバッグの中から工具箱を取り出して、展開中のキャッスルウォールの調整に取り掛かった。

休んで迷惑をかけてしまったから、せめて朗報をお届けしたい。

その日私は授業をサボつてガジェットの調整に時間を費やしたのだつた。

放課後、風紀委員を訪ねてご迷惑おかけしたお詫びの菓子折りとガジェットを提出したのだが、そこまでしなくていいと言われてしまつた。

反省。